

園芸活動を媒介した地域ネットワーク形成および大学生支援に関する研究

- 学生と地域住民主体の園芸活動ワークショップ実施を通じて -

南九州大学環境園芸学部 林 典生 (会員番号 5404)

キーワード：園芸活動、地域ネットワーク、大学生支援

1. 研究目的

演者は今まで、老人保健施設、高齢者デイサービスといった高齢者分野、知的障害者授産施設といったしょうがい者分野および精神科病院といった精神保健福祉分野で活動現場や学生と協働しながら園芸活動実践を行ってきた。しかし、今までの実践は学生主体にしながらすすめてきた現状があり、大学の経営判断により、昨年4月に大学自体、同じ宮崎県内の高鍋町から都城市に移転した時に、移転前に実践してきた活動現場が4か所あったが、移動時間が2時間以上かかることもあり、全て活動現場から撤退すると同時に、園芸活動の実施ペースが減少している状況である。その一方で、都城市内では高齢者、しょうがい者、児童関連分野での福祉・生涯学習の現場での園芸活動実践を行うとともに、市内の様々な現場より活動実践に関する希望が出ているが、十分な支援が行えない状況である。

また、キャンパスソーシャルワーカーネットワークが結成されたり、様々な学会で大学生の生活支援に関するシンポジウムが行われる様に、日本全国の大学において、発達しょうがいを持ち合わせている学生や勉学に意欲がわきにくい学生等といった支援が必要な学生もおられる中で、活動現場および地域社会にもその実情を理解していただく必要性を感じている状況である。その状況の中で、演者は活動現場の職員や関係者の協働した園芸活動を進める方法を考えながら園芸活動の実践を行ってきた。その実践の中で本研究は都城市社会福祉協議会と協議の中で、A地区地域包括支援センター職員からの介護予防及び地域ネットワークづくりで園芸活動が活用できないかとの相談があり、開始されたものである。

2. 研究の視点および方法

本研究はA地区高齢者クラブおよび本学学生が協働で園芸活動を実施し、A地区地域包括支援センター、A地区社会福祉協議会および大学教員が活動実践サポートチームを結成し、支援することを試みた。学生が地域住民に園芸活動を勉強した後に、地域住民が他の地域住民に園芸活動を教えることを通じて、自然と地域住民同士の交流で介護予防になるとともに、地域住民同士のネットワーク形成を目指した。そのために、園芸活動を教える地域住民に対して、意識や問題点の共有化を目指すためにも事前に打ち合わせを実施した。

2010年11月28日に関係者顔合わせ・第1回目園芸活動日程決定を行い、12月7日に活動手順の確認など事前打ち合わせを行った。12月17日にA地区公民館にて、第1回目のハーブせっけんづくりを実施した。また、12月22日に元A地区住民がおられる高齢者施設へのハーブ

せっけんを届ける活動が行われた。2011年1月13日に前回の活動の反省会を行い、1月28日に活動手順の確認など事前打ち合わせを行った。2月11日に南九州大学にて冬の寄せ植えづくりを実施した。また、活動の成果及び今後の課題を探るために2回の参加終了直後に参加者へのアンケートを行い、第1回目は46名のうち41名、第2回目は68名のうち60名の回答が得られた。質問項目の内容は第1回目では活動内容、高齢者クラブメンバーとの協働、効果について質問した。第2回目では第1回目の質問項目と同様の内容にて実施した。

3. 倫理的配慮

この研究を実施するに当たり、南九州大学倫理委員会に研究計画及び成果物について審査を実施して、了承が得られ、かつ実践現場でも了承されたものである。この研究は個人情報保護の視点から、利用者、職員などの関係者および学生に説明を行い、活動全体の参加記録の作成を行うとともに、行動観察、インタビュー、アンケート調査を実施した。

4. 研究結果

第1回目の結果は会話を弾ませることが出来たなどの好評が得られ、今後、花の寄せ植えや野菜づくりなどの植物の栽培活動を行いたいとの要望が見られた。第2回目の結果は子どもから高齢者まで多数参加され、活動が楽しく参加できたとの話をいただくとともに、寄せ植えの活動が楽しいことや地域の人たちと久しぶりに会えたりするとの好評が得られ、今後も同様の活動に参加したいとの要望やアドバイザーが教えてくれて、ありがたいとの意見が見られた、地元の新聞やテレビ局に取り上げられるほど反響をいただいた。

本研究を行う中で、担当した学生自身、他の活動現場より実践を断られたぐらい支援が必要な学生であったが、学生が積極的に高齢者クラブメンバーと関わる中で、その学生に自信がつくとともに、適切なコミュニケーションが出来るようになり、以前より関わっている学生支援スタッフが学生の急激な変化に喜んでいる状況が見られた。これは地域住民だけではなく、学生も力をつけてきたことが考えられる。このような他の学生にも体験でき、かつこの活動が楽しく続けられるようするためにも、地域住民の方や大学生が日常的な交流を基本に、無理なく活動を行う必要が考えられる。今後も十分な打ち合わせと準備を重ね、アドバイザー役の技術が向上できるように支援し続ける必要があると考えられる。今後、この活動が楽しく続けられるようするためにも、地域住民の方や大学生が日常的な交流を基本に、無理なく活動を行う必要がある。今後も十分な打ち合わせと準備を行うとともに、アドバイザー役の技術が向上できるように支援し続ける必要があることが明らかになった。但し、他の地域より同様の活動を行ってほしいとの依頼があるとともに、担当した学生が今まで進路に悩んでいたが、この活動に参加したことが契機になり、介護関係の資格を取得する勉強を行って、介護関連の仕事を目指すようになった。

また、本研究の一部は文部科学省科学研究費若手研究(A)(課題番号:206880110001)および厚生労働省の委託事業(受託事業先:A地区地域包括支援センター)として行われたものである。